



ドラネ《玉乗りをする男、ビスマルク》神奈川大学図書館蔵

目次

- シリーズ・プランゲ文庫の世界③ 寺沢 正晴 2~3p
- 温故学会会館を訪問して 中村 裕史 4p
- 図書館の所蔵資料紹介 5p
- 【連載】図書館のススメ (その3) 鶴見大学図書館 6p
- 「図書館だより」に見る1970、80年代の図書館 (シリーズ・神奈川大学図書館の歴史を語る! ③) 荏原 直子 7p
- 図書館からのお知らせ 8p
- 今号の表紙 8p
- 編集後記 8p

図書館のコトバ

その③「レファレンス」

レファレンスとは参照、照会、照合を意味する言葉。“リファレンス”と発音することもある。

図書館では参考調査を意味する「レファレンス・サービス」のことを指し、また参考図書を「レファレンス・ブック」と呼ぶ。

本学図書館では図書館資料の探し方がわからない時、ある事柄について調べたいとき、本学図書館にない資料を閲覧したいときなどは、レファレンス・カウンター(横浜は2F)にて相談を受け付けている。

プランゲ文庫の世界③

寺沢 正晴

太宰治の新資料発見

「太宰7作に検閲 GHQ、切腹など削除指示
作家の太宰治が終戦直後の45～47年に出版した4冊
の中の7作品が連合軍総司令部 (GHQ) の検閲を
受け、大幅に内容を修正されていたことがわかった。
検閲関連の資料を多く保存する米メリーランド大の
プランゲ文庫からゲラなどが見つかった」
〔朝日新聞〕2009年8月2日付朝刊)

発見したのは、近代日本文学を研究する、米ペンシルベニア州立大のジョナサン・エイブル助教授と長崎総合科学大の横手一彦教授。発見した時期は、今年
の4月～5月であるという。

私が目にした、プランゲ文庫に関する最新の記述である。

プランゲ文庫とは？

ここにいう「プランゲ文庫」とは何か。

その世界に関心のある、学者や研究者にとっては自明のことであろうが、一般の読者、特に学生などにあつては、それほど知られているとも思われない。そこで、この小文では、「プランゲ文庫の世界」を、簡単に紹介してみることにしよう。

1945 (昭和20) 年8月15日、天皇の終戦詔書により、戦争は終結する。敗戦。その結果、日本は、連合軍占領下に置かれる。連合軍総司令部 (GHQ) および連合軍最高司令官 (SCAP) ダグラス・マッカーサーは、数多くの指令を発令、占領政策を推進して行った。その政策の一環として実施されたのが、新聞・雑誌・書籍等の出版物を始めとして、放送・映画・演劇等、あらゆるメディアに対する検閲であった。検閲のために、すべての出版物の提供が求められる。その結果として、占領軍の検閲を担当していた民間検閲部隊 (CCD) に、膨大な出版物が集積されることとなった。

占領軍による検閲は、1949年の10月に終了し、11月にはCCDも廃止される。その際、廃棄処分されようとしていた検閲資料の歴史的・資料的価値に着目し、その保存・移送・収蔵に尽力したのが、メリーランド大学歴史学教授であり、占領期間、GHQ参謀第二部 (G-2) に勤務していた、ゴードン・W・プランゲ博士であった。膨大な資料は、米軍が当時コンテナとして使用していた木箱に詰められ、横浜港より輸送され、メリーランド大学マッケルデン図書館に収蔵されることとなった。木箱の数は、五百箱とも六百余箱ともされている。その資料の多くは、日本においては散逸してしまい、現存していない。また、その中には、発禁処分となったもの

のも、多く含まれている。そして、この膨大な資料群は、1978年、博士の功績を称え、正式に「プランゲ文庫」と命名されることとなったのである。

文庫のマイクロ化と目録の編纂

しかし、その貴重な資料も、日本人に知られることは、長い間、ほとんどなかった。資料の整理は、60年代より開始されてはいたが、その膨大さ故に、遅々として進まなかった。70年代に入ると、慶応大学図書館によって紹介されたこともあり、プランゲ文庫の存在が、日本人研究者にも知られるようになった。マッケルデン図書館を訪問する日本人も増えてきた。とはいえ、70年代末から半年間、同図書館に数日置きに通うことが日課であったという江藤淳氏によれば、「この資料はマッケルデン図書館の地下室に死蔵されていた」のである。

私がプランゲ文庫の存在を知ったのは、文庫本化された、同氏の『閉ざされた言語空間』によってであり、時代が昭和から平成へと移行する頃である。「占領期の検閲」の実態を資料によって跡付け、「戦後日本」を論じた同書では、「検閲された側の資料」として、プランゲ文庫が紹介されている。しかし、特に占領期やその検閲に関心があったわけでもなく、怠惰な私にとって、文庫の探求は、満天の星の中から生命の存在する星を探すような、途方も無いものを感じられ、はるか彼方にあるものであった。

そんな頃、プランゲ文庫に収められた出版物は、まもなく、半世紀の歳月を経ようとしていた。終戦直後の用紙事情や保存状況の問題もあり、その間に資料は、相当に劣化していた。そのため、同文庫の保存が求められ、1992年から99年にかけて、メリーランド大図書館と日本の国会図書館の協力によって、雑誌と新聞のマイクロ化が進められ、それに並行して、目録編纂作業も進められた。その結果、両図書館において、プランゲ文庫の閲覧が可能となり、求める資料の検索も、以前と比較してみれば、格段に容易となったわけである。

プランゲ文庫の資料的価値

ここまで述べてきたように、プランゲ文庫には、占領期における検閲の実態を追及する資料としての価値がある。しかし、プランゲ文庫には、もう一つ別の資料的価値がある。それは、「戦後」という、現在に連続する時代の原点における、日本と日本人の実態を探求するための一次資料としての価値である。

1945年8月15日から、52年4月28日の講和条約発効に至る「敗戦・占領」という体験は、日本にとって、未曾有

の経験であった。この間に、日本社会は、大きく変化している。歴史的に大きな出来事のみをあげても、戦後改革・新憲法施行・東京裁判・朝鮮戦争・講和条約・日米安全保障条約の締結、等々。それらが、どのように報道され、どのように論じられていたのか。あるいは、論じられなかったのか。プランゲ文庫は、それを確認するための第一級の資料である。

しかし、それと同様に興味深いことは、終戦直後の日本人の心理や生活を探求するために有効な資料が多数保存されていることである。プランゲ文庫に所蔵されている新聞・雑誌には、現在にまで継続して発行されている著名なものもあれば、創刊されるとまたたく間に廃刊となったものもある。学級新聞や村の青年団の雑誌やピラ等も含まれている。したがって、プランゲ文庫を渉猟してみれば、有名・無名の当時の日本人の姿を、かいまみることが出来る。長い戦争から解放され、新たな日本へと向う日本人の表現意欲と読物への飢餓感が、百花繚乱の活字文化として開花したのであるか。

プランゲ文庫の活用

プランゲ文庫の収蔵資料は、新聞約18,000タイトル、雑誌約13,700タイトル、図書・パンフレット約71,000タイトル、報道写真約10,000枚、ポスター90枚、地図約640枚であり、神奈川大学図書館は、新聞のマイクロフィルム3,826巻と、雑誌のマイクロフィッシュ62,969枚をフルセットで所蔵している。日本全体の大学や研究機関を見渡して見ても、そのような施設は、数箇所しか存在しない。

それでは、その貴重な資料を、どのように利用すれば良いのだろうか。図書館にマイクロ版とともに備えられている冊子目録を参考に、必要と思われる資料を請求してみるのも、一つの方法であろう。しかし、この方法は、ある程度の知識を保有していないと、少し難しい。

インターネットで「プランゲ文庫」を検索してみると、「20世紀メディア研究所」の運営する「占領期新聞・雑誌情報データベース」というサイトがある。そこに登録し、キーワードで検索をしてみる。たとえば、戦後最初に流行った流行歌の「リンゴの唄」に関する資料を見てみたかっとする。上記のサイトで検索してみると、雑誌28誌と新聞3紙に関連記事があることが分かる。それを基礎に、必要な資料を事前に申請しておいて、マイクロ化されたプランゲ文庫を閲覧する。資料の操作が分からない場合は、係員の方に余裕がありそうな時に、指導を受ければ良いだろう。

20世紀メディア研究所を設立し、上記データベースのデータベース化を推進した委員会の代表者でもある、早稲田大学教授の山本武利氏は、“平凡な女性であった”という御母堂様が亡くなる直前に、プランゲ文庫にあった彼女の短歌を採集し、一冊の素敵な小冊子にまとめている。今も私の本棚にあり、時々、感慨深く拝読させていただいている。あれほど遠くにあったプランゲ文庫が、こんなにも身近なものとなって

いたのである。

プランゲ文庫の世界は広大である。時には、あてもなく、その世界を散策してみるのも良いだろう。もしもあなたが、ロマンチックな映画ファンであるとするならば、当時の『キネマ旬報』などを眺めてみたりしてはいかがなものか。もしもあなたが、漫画オタクであるとするならば、手塚治虫の初期作品のいくつかを楽しむことができるだろう。あるいは、ほんやりとその世界に浸ってみたとしても、新たな発見があるかもしれない。少なくとも、明日の日本を作ろうとする当時の日本人の、エネルギーと息吹とを感じることはできるのではないだろうか。

主要参考資料

文生書院ホームページ

20世紀メディア研究所ホームページ

国立国会図書館ホームページ

山本武利他編『占領期雑誌資料大系 大衆文化編』

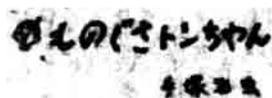
(2008/2009) 岩波書店

(てらさわ・まさはる 人間科学部教授)



『キネマ旬報』

第36号 6月下旬号(1948年)



“手塚治虫”の名前が見える。

手塚治虫の4コマ漫画

「ものぐさトンちゃん」

(『新世界』1948年2月号第3巻1号)

神奈川大学図書館所蔵のプランゲ文庫資料より

温故学会会館を訪問して

中村 裕史

渋谷駅から「日赤医療センター行」のバスに乗り、三つ目のバス停「国学院大学前」で降りる。そこは氷川神社も程近く緑も豊かであり、渋谷であることを忘れさせるような静かさが辺りに漂っている。その一角に目指す温故学会会館がある。昭和2年に建設された鉄筋コンクリート二階建ての建物であり、渋谷栄一などの各界の著名人の協賛を得て完成した。関東大震災の経験を生かし建設されたという会館は、当時としては極めてめずらしい耐震耐火構造の重厚な建造物である。この建物の中に塙保己一（はなわ・ほきいち）畢生の大事業である『群書類従』の版木17,224枚（国・重要文化財）が、第二次世界大戦などの幾多の危機を乗り越えて保存されている。



（社）温故学会理事長代理の斎藤幸一氏の案内で、ところ狭しと版木が並んでいる倉庫に入る。墨によって表面が黒曜石のようになった版木の文字が、小さな窓から入る光を反射して鈍く黒光りしている。倉庫内の様子は事前に写真等ではいたものの、やはり実物のみが醸し出す迫力というか執念というか、例えようのない存在感に圧倒される。版木の材料は最高級の山桜。現在でも十分に使用に耐える状態を保っている。事実、温故学会では群書類従の原版木を使用し、長年にわたって一般希望者への摺立頒布を行っている。

塙保己一という人

さて、塙保己一と聞いて、いったいどれだけの人がその名前を知っているだろうか。第二次世界大戦以前の教科書には必ず掲載されていたが、最近ではほとんど見られなくなってしまった。塙保己一は延享三年（1746年）の生まれ。7歳で視力を失ったが、34歳にして『群書類従』の刊行を決意。以後、41年の歳月と莫大な経費を費やし、文政二年（1819年）に完成をみた。塙保己一74歳のときである。

塙保己一にまつわるエピソードは枚挙に暇がないが、驚異の記憶力の持ち主であったことは良く知られている。塙保己一の書庫には6万冊の蔵書があったとされ、その全てを一字一句誤ることなく記憶していた

という。むろん、これだけの大事業が成し遂げられたのは塙保己一ただ一人の力量のみによるものではなく、多くの協力者に恵まれていたことは言うまでもないが、それも保己一人の人徳の成せる技であろう。更に、塙保己一が生きた時代が、江戸の出版文化がピークを迎えた時代であったことも忘れてはならない。エピソードとしてもう一つ紹介すれば、ヘレン・ケラーが人生の目標とした人物としても知られている。ヘレン・ケラーは昭和12年4月の初来日の際に温故学会を訪問し、塙保己一の像や愛用の机に触れ、塙保己一がどれ程自分の心の支えになったかを述懐したという。

『群書類従』について

次に『群書類従』であるが、これは25の部門からなる大文献集であり、全666冊、総ページ数約34,000ページ、収録文献数は1,277種に及ぶ。その編纂の目的は、古来の貴重な文献が散逸し、失われることなく後世の人々に確実に伝えようと編まれたものであり、「各地に散らばっている貴重な一巻、二巻といった書を取り集め、後の世の国学びする人のよき助けとなるよう」にとの保己一の考えによるものであった。

活きている版木

温故学会が摺立頒布を現在でも行っていることは既に述べた。また学会では、毎年「江戸時代の版木を摺ってみよう」という企画を実施しており、畳敷きの2階講堂において重要文化財の版木を実際に摺る事ができる。筆者は8月2日に参加した。小学生も多数参加しており、緊張のおもちで作業に取り組んでいたが、摺りあがると周囲から自然と拍手が起きていた。畳に正座をし、版木に向き合うと不思議と心が落ち着く。版木に墨をのせパレンで摺るとコリコリという細かな感触が手に伝わってきて何とも心地よい。素人作業につき出来栄は推して知るべしではあるが、忘れられない貴重な体験となった。



斎藤幸一理事長代理を始め、温故学会の皆様に変なお世話になりました。心より御礼申し上げます。

（なかむら・ひろし 図書館情報サービス課 職員）

図書館の所蔵資料紹介

1854年、ペリー艦隊は神奈川のはずれの寒村に上陸しました。この戸数わずか100戸ほど、半農半漁で生計を立てる人々の小さな村が、現在人口約370万の大都市へと発展した横浜です。

今年開港150周年を迎えた横浜では「開国博Y150」が開催され、本学図書館でも「神奈川大学図書館所蔵貴重書に見る『開港期の横浜』展」と題して展示を行っています。今回は展示資料の中から代表的な資料を2点紹介いたします。

ペリー艦隊日本遠征記 / ペリー著、ホークス編

アメリカが日本に開国を迫ったのは、太平洋横断航路の開設にあたって石炭の補給地が必要とされたことと、捕鯨の際の食糧と燃料の補給地を確保したいという理由があった。ペリーが日本への遠征を受諾したのは57歳、引退を間近に控えた年齢のため一度は断ろうとしたが、植物コレクターでもあったペリーのまだ見ぬ日本の地で新しい動植物にめぐりあえるかも知れぬという期待もあり、1852年東インド艦隊司令長官としてヴァージニア州ノーフォークを出航した。

出航前からペリーは「遠征記」の出版イメージを思い描いていたようで、できるだけ多くの人に読んでもらいたいとの思いから、遠征中の全ての記録を歴史学者ホークスに託し編集・執筆を依頼した。「遠征記」は全4巻構成である。ペリーは遠征で新たに目にするものすべてを記録しようと画家や写真家、科学者などを同行させた。第1巻はアジアや日本への遠征記で、横浜への上陸と交渉の過程は第18章から第21章に書かれている。第2巻は動植物の記録、第3巻は「黄道光」と呼ばれる天文現象の観察記録である。残り1巻は地図資料となっている。

(A215-1,2A,2B,3-33)



神名川横濱新開港圖 / 五雲亭貞秀 1860年

開港直後の万延元年(1860年)から文久元年(1861年)にかけて、外国人の風俗を主な対象として描かれた版画が爆発的な人気を呼んだ。これらの版画を「横浜浮世絵」と呼ぶ。外国人、西洋風の建物、新しく変わっていく街並み。外国人はどんな姿をし、どんな生活をしているのだろうか…。当時の横浜に暮らす人々でも実際に外国人やその生活を見る機会は少なく、それゆえ人々は余計に好奇心を掻き立てられた。

横浜浮世絵は当時の好奇心旺盛な人々の視覚的娯楽であり、かつ重要な情報源であった。《神名川横濱新開港圖》を描いた五雲亭貞秀(1807-1878?)は下総国布佐の生まれ。本名橋本兼次郎。横浜浮世絵の第一人者である。三代豊国門下(国貞)歌川を名乗り他にも玉蘭齋、一玉齋、玉蘭主人の名を使った。当時外国人との接触はかなり難しかったものと思われ、この作品では手前に長崎浮世絵から書き写したような南蛮人が二人いる他には外国人の姿を確認することができない。貞秀は西洋の銅版画や石版画からイメージを作り上げエキゾチックな雰囲気のある浮世絵を作っていたと思われる。

(B092.2-133)

図書館のススメ (その3)

鶴見大学図書館



今回は、みなさんが利用できる他大学の図書館をご紹介します。神奈川大学の学生および教職員は、本学の図書館以外にも、横浜市内大学図書館コンソーシアム(全14大学)や神奈川県内相互協力協議会(全45館)に加盟している大学図書館の利用が可能です(具体的な利用方法については、神奈川大学図書館ホームページを参照)。鶴見大学はこの両方の協定に参加している、神奈川大学からも比較的近い大学図書館となります。

鶴見大学は、歯学部および文学部で構成されていることもあり、神奈川大学図書館とはまた違ったコレクションを所蔵しています。歴史や国文学系の資料は、神大生にとっても非常に魅力的なものだと思います。また、キャンパスが一つで図書館も一つなので、資料が一箇所にすべて集中しているため、使いやすい図書館となっています。

図書館の入口に入つてまず目に飛び込んでくるのが、展示のコーナーです。鶴見大学図書館では展示に力を入れており、さまざまな企画展示を行っています。そこでまず目を引くのが、資料



がすべて色彩を持っていること。つまり、本のカバーは売られている状態と同じようにつけておくという方針を採っているため(その方が書店のイメージで学生のみなさんが本を手に取りやすいのではないかと配慮から)、書架にも色彩感があり、親しみやすい雰囲気となっています。閲覧席の数も比較的多く、ゆつくりと勉強ができる環境です。

これはあくまでも鶴見大学の学生さん向けサービスですが、鶴見大学図書館には「学習アドバイザー」がいます。これは各学科の院生が「学習アドバイザー」として、様々な相談にのってくれるというサービスです。

毎週決まった時間に図書館にいて、レポートのまとめ方や学習方法、進路相談まで幅広く、学部学生からの質問を受け付けています。

鶴見大学図書館の蔵書は、コンソーシアム加盟館すべての蔵書を横断的に検索できる、鶴見大学提供の「横断検索サービス」を利用すると便利です。(http://library.tsurumi-u.ac.jp/mutualpub/mutual.html)。

神奈川大学から鶴見大学へは、JR東神奈川駅まで徒歩もしくはバスで行き、そこから京浜東北線に2駅乗り、鶴見駅で下車するのが一番便利です。鶴見駅から徒歩10分程度のところに鶴見大学があります(石原裕次郎のお墓で有名な總持寺が同じ敷地にあります)。案内掲示に従って大きな階段を登って行くと、図書館があります。図書館入口に、神奈川大学図書館のような入館ゲートはありませんので、入館後、正面のカウンターにて入館の手続きをしてください。

みなさんも利用することができますが、あくまでも鶴見大学の方の利用が優先です。鶴見大学の方々にご迷惑をかけないよう、マナーを守って利用するようにしてください。開館日が神奈川大学とは異なりますので(日・祝は閉館)、カレンダー等で確認の上、ご利用下さい。

鶴見大学図書館利用案内

所在地

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3
JR鶴見駅・京急鶴見駅徒歩約10分
TEL:045-580-8274
(鶴見大学図書館ホームページに図書館までの詳しいMAPがあります)

鶴見大学図書館ホームページ

<http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/index.html>

利用方法については、鶴見大学図書館および神奈川大学図書館のホームページに記載があります。身分証は必ず持参してください。コンソーシアム等での利用の場合は、資料の貸出はできません。

※開館日および開館時間については、鶴見大学図書館ホームページの「開館カレンダー」を参照ください。

「図書館だより」に見る1970、80年代の図書館

荏原 直子

「神奈川大学図書館の歴史を語る！」3回目となる今回は、1970年代から80年代の「図書館だより」を通して当時の図書館の側面を振り返ってみたい。

ガリ版刷り「図書館だより」時代

「図書館だより」第一号は、1973年4月15日に発行された。当時はB4サイズ、ガリ版刷り、片面のみの印刷である。1974年4月号からは同サイズのガリ版両面印刷になり、1975年6月号からは、現在の「図書館だより」と同じB5版、6～8頁構成の印刷物になった。

記念すべき「図書館だより」第一号の内容は、館長によるエッセイ、入館から退館までをフローチャートで示した図、利用案内、学生購入希望図書決定リストから構成されており、手作りの誌面は時代を感じさせる。この「ガリ版刷り「図書館だより」」では約1年半にわたって「図書館所蔵の二次資料紹介」を連載している。当時の図書館は全ての図書が閉架式だったため、カード目録以外にも探すツールがあることを紹介し、利用者が必要な本をみつけられるようにと図書館員が心を砕いているのが感じられる。1973年12月の第8号には「ささやかながら週刊誌のコーナーを開いた」とある。当時は場所や予算の関係で6誌のみの閲覧コーナーだったようだが、これが現在の1F雑誌閲覧室のスタート時の姿である。

掲載記事で面白いのは、学生の要望に対する回答や利用者マナーに関する記事である。その一部を紹介しよう。「図書にインクをこぼさないように(1974年1月第9号)」というお願いからは、当時、万年筆やインク壺を使って勉強していた学生が多かったことがわかる。1974年5月第12号には、閲覧機の確保のために机の蛍光灯のグローを持ち帰る学生がいる、という文がある。これはグローを持ち帰れば蛍光灯がつかないのでその席に坐る人がなく、いつでも自分が占領できるということらしい。記事ではこのような身勝手な行為を、怒る気もしない、情けない、と非難しているが、今読むとこのような大胆な方法を使ってまで閲覧席を確保して、勉強した当時の学生にはある種の感動を覚えてしまう。今、そこまでして図書館で勉強しようと思う学生はいるのだろうか。

(実際にいと困りますが、)

1970年代後半から新図書館時代

1975年6月号から「図書館だより」はB5版サイズの印刷物になり、この号が新たに通巻第1号となった。通巻第1号はタイトル部分のみカラー印刷、他は黒の一色刷りのシンプルなデザインで、内容は教員による巻頭エッセイ、近著紹介、参考図書リスト、利用案内などからなる。これ以降「図書館だより」は、約30年以上にわたり基本的にこの通巻第1号の構成を踏襲している。1976年6月通

巻第6号では初めて在学生による執筆記事が掲載されている。以降、エッセイや「先輩から後輩へ」という連載で在学生に執筆をお願いしている。

70年代から80年代にかけての図書館は、1980年の新図書館建設を機に大きく発展した。「図書館だより」には「新図書館のポイント」と題した新しい図書館の機能や施設を説明した記事が約一年間にわたって連載されている。広い開架式閲覧室を中心に、グループ閲覧室や個人キャレル、視聴覚資料室や談話室など、利用者の多様なニーズに応えることができ、外観や内装も美しく趣のある図書館で働く館員の喜びが、当時の「図書館だより」からは伝わってくる。定期的に掲載される「レコード・コンサートスケジュール」のお知らせからは、視聴覚資料室の小ホールで毎日のようにレコード・コンサートや講演会、上映会が行われ、新図書館建設を機に視聴覚資料を使った企画が活発に行われていたことがわかる。

「図書館だより」と図書館員

「本館所蔵図書の紹介」-特に1979年から1993年まで続いた貴重書の紹介は、図書館員がその資料について調べ執筆したものである。これらの記事は後の貴重書目録『古典逍遙』のベースとなった。「近著紹介」は、図書館員が順番で一冊につき五百字程度の紹介文を書いたものである。これらの文面からは一冊の本に真剣に向き合う当時の図書館員の姿が伝わってくる。インターネットもデータベースも無かった当時、数百年前に発行された貴重書であれ新刊書であれ、今のように端末に向えば必要な情報が簡単に手に入る時代ではなかった。答えにたどり着くためには自らの知識や直感を手がかりに書庫を歩き回って資料を探し続けなければならなかった。私も当時、そのようにして書庫を歩いた。どこまでも続く背表紙を目にして世界の広さを実感した。答えにたどり着くまでの苦労は、自分がいかに何も知らないかを思い知らせてくれた。だが、こうした経験こそが自分の糧になることを当時の図書館員達は知っていたのではないだろうか。

この時代の図書館には、言語、歴史、文学などあらゆる分野に詳しく、何を聞いても答えを返してくれる先輩達や、たった一冊の本を分類するために地下書庫にもぐって地道に調べ物を続ける先輩達がいた。今でも本を開くと、標題紙に当時の先輩方が鉛筆で書き込んだ分類番号のメモが残っている。私はそれを目にするたびに、自分は今でも真剣に、一冊の本と向き合っているのだろうか、と自分自身に問いかけるのである。

(えばら・なおこ 図書館情報サービス課 職員)

図書館からのお知らせ

◎ 資格・就職本・雑誌配布フェア（横浜）

図書館で所蔵している、資格本・就職本関連資料の旧版および一部雑誌など、廃棄予定の資料を下記日程で希望者に無料でお配りします。

人気の資料はすぐになくなるのが予想されますのでお早めどうぞ！

期 間：10/5（月）～10/11（日）

※なくなり次第終了

対象資料：横浜図書館1階で配架している資格・就職本の旧版および古い雑誌（Hanako等）

開催場所：横浜図書館地下1階 休憩スペース

配布方法：入館資格者であれば、対象資料を自由に持って行って構いません。

◎ トイレの改修を行いました（横浜）

横浜図書館のトイレ改修が完了しました。

工事期間中は、大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

3階は男女の場所が従来と変更になっていますので、ご注意ください。

マナーを守って、きれいに使ってください。

平塚図書館からのお知らせ



**書庫改修工事のため下記の期間、
書庫内資料および
視聴覚資料は利用できません。
ご不便をおかけしますがご了承ください。**

記

期間：平成21年7月30日（木）～
平成22年4月30日（金）〔予定〕

変更：①書庫内資料は利用できません。
②図書は横浜図書館からの取寄せや、
ILL他館現物貸借で対応いたします。
③雑誌は文献複写依頼にて対応いたします。
平成21年新着洋雑誌は、開架閲覧室等にて
利用可能です。

詳しくはカウンターにてご相談ください。

**開架閲覧室は通常どおり
開室していますので
ご利用ください。**



編集後記

今年の夏は例年のような強烈な暑さの日が少なく、なんとなく物足りなかったように感じる。今はもう秋、まもなく冬の寒さがやってくるだろう。

日本には四季がある。私達は季節の移り変わりを風の冷たさや樹木の葉の色、日の長さ、街のイルミネーションなど様々なものを感じとる。身近なところでは、その時々のお食べ物や飲み物に季節の移り変わりを感ずるという人も多いだろう。野菜や果物は勿論、魚、ワインなど様々なものに旬というものがあり、旬のものを取り入れることによって、私達の身体には季節を乗り切るエネルギーが生まれる。

食べ物に関する季節へのこだわりも人それぞれにあるだろう。餅はお正月に食べるものだと信じている人、みかんを食べるときはコタツに入らなければ気分が出ないという人、ウォッカは冬しか飲まないと言う人…。最近では夏におでんが、冬にスイカが売られる。季節にこだわらず、食べたいものはいつでも食べればいいのか、という人が増えているということだろうか。

横浜図書館の地下書庫には食に関する面白い本がある。OPACで“タイムライフブックス、世界の料理”と検索すると様々な国の料理本が表示される。これは各国の食文化をテーマに1970年代に発行されたシリーズ本で、各国の郷土料理とその作り方、その土地の風景が、豊富な写真によって紹介されている「日本料理」と「日本の行事料理」の巻には、今はもう失われた日本の風景があり、私達が失いかけている食文化がある。眺めるだけでも楽しいシリーズなので、ぜひ一度見てほしい。

(N.E)

今号の表紙

Draner 《L'Home à la Boule》

ドラネ《玉乗りをする男、ビスマルク》1871？
“足が滑って、バランスをなくしそうだ…”

多色刷り石版画 45.7×30.8cm

神奈川県立図書館所蔵 パリ・コミュニケーション諷刺画の1枚。